



Title	mientras節における接続法 : 時と条件
Author(s)	近藤, 由佳
Citation	Estudios Hispánicos. 2007, 31, p. 219-236
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97979
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

mientras 節における接続法 一時と条件一

近 藤 由 佳

0. はじめに

現代スペイン語の叙法については、数多くの研究が行われてきたが、近年、認知言語学の観点から叙法を考察しなおそうとする試み¹がある。スペイン語における叙法体系について扱ったそれらの研究は、大別すると、①特定・不特定²、②現実・非現実³、あるいは、③Realis・Irrealis⁴によって直説法・接続法が決定されるという三つの説にまとめることができる。

それらの諸説は、時の節における叙法決定において、後時・非後時という枠組みで説明される、つまり「特定、現実、Realis」と「不特定、非現実、Irrealis」は、それぞれ「非後時」と「後時」に包括されると考えられる。それは、時を表す文⁵が、主節・従属節の出来事時 (ET₁ と ET₂) と参照時 (RT⁶) の時間関係を示すというその性質から、時を表す文における従属節 (以下、時の節と呼ぶことにする) の叙法もまた、ET と RT の時間関係によって決定されるからである。

時の節における叙法の中でもとりわけ、ET と RT の時間関係と cuando 節の叙法決定との関係を明らかにしたのが、近藤 (2004, 2006) である。

近藤 (2004) では、cuando+sub⁷を中心に扱い、主動詞 (以下 V₁ と呼ぶことにする) と従動詞 (以下 V₂) に関するコーパスを基にした統計的分析

1 Givón 1994, Haverkate 2002

2 Porto Dapena 1991

3 Gili Gaya 1991

4 Givón 1994

5 本稿では、時の従属節と主節を合わせて、時の文と呼ぶことにする。Pérez Saldanya (1999: 3311) は、時の従属節 (oraciones subordinadas temporales) が指定する出来事と主節の出来事を時間的に制限するとして、cuando, mientras, al (mismo) tiempo que, siempre que, cada vez que, antes de que, después de que, luego que, una vez que, al poco tiempo que, desde que, hasta que, tan pronto como, a medida que を例に挙げている。

6 Comrie (1985) の Event time (出来事時) と Reference Time (参照時) を指す。なお参照時に Speech Time (発話時) を含むことにする。

7 本稿では cuando 節の従動詞が接続法であることを、cuando+sub とする。

を行った。V₂が接続法るとき V₁は命令形、直説法現在形 (+不定詞)、直説法未来形、直説法過去未来形の形態をとる傾向が高いことが調査の結果から明らかになったが、それらの形態を後時指向と呼び、cuando+sub はテンスに限りなく近い役割を果たしていると結論づけた。

また、近藤 (2006) では、cuando+ind⁸について RT と ET の時間関係の観点から考察し、cuando+ind でも「属性化」を表す場合は後時を示すことができることから、常に非後時によってcuando+ind が決定されているわけではないことを確認した。さらに、cuando+ind を特徴づけるのは、「前時」と「属性化」であることも指摘した。「前時」は ET が RT より以前にあることから、RT よりも前時を示す歴史的現在⁹の用法を含み、一方、「属性化」は、無時間的事実¹⁰、つまり、いわゆる一般化 (総称)¹¹の用法に加えて、習慣¹²を含んでいる。この一般化 (総称) と習慣は、E₂ (主節が表す出来事) と E₂ (従属節が表す出来事) が前時から RT に渡って繰り返し生起することから、後時にも E₁ と E₂ が起こりうることが予想され、cuando+ind を用いて後時の出来事を示すことが可能になる。このことを cuando 文¹³が属性化すると呼ぶことにしたが、cuando 文が属性化したとき、ET が複数回存在することから ET (主節と従属節の示す時) と RT の時間関係を示す「時」¹⁴の役割が薄れ、p (従属節の命題¹⁵) と q (主節の命題) が示す「条件」¹⁶に焦点が当たることも指摘した。

この条件と時の関係については、『条件文と時を表す文には大変な複雑さが存在している』と Pérez Saldanya (1999: 3726) がいうように、時の節には時と条件が内在されているが、本稿においては、「時」とは RT と ET の時間関係を示す機能であり、「条件」とは $p \rightarrow q$ (p ならば q) の論理的関係を

8 cuando 節の従動詞が直説法であることを、本稿では cuando+ind と呼ぶ。

9 Cuelgo el teléfono y, cuando voy a salir del bar, veo al fotógrafo apoyado en la barra tomándose un whisky. (Crea, 1990, Rico Godoy, ESPAÑA)

... cuando Cristóbal Colón descubre América se produce una de las más importante revolución gastronómica del mundo. (Crea, 1996, Olivas Weston, Rosario, PERÚ) (sic)

10 Gili Gaya (1991) を参照。

11 También los hijos, cuando llegan a una cierta edad, abandonan la casa paterna para ir a buscar su propia vida. (Crea, 1990, Tiempo, ESPAÑA)

12 ... cuando voy de vacaciones nunca voy a la playa. (Crea, 2002, Faro de Vigo, ESPAÑA)

13 本稿では cuando 節と主節をまとめて cuando 文と呼ぶことにする。

14 「時」とは ET と RT の時間関係を設定することを指すことにする。

15 杉本 (1998: 88) は「命題とは個々の可能世界に関して、真か偽を与えてくれる関数 (function) である」としている。

16 本稿では p であれば q である ($p \rightarrow q$) が成り立つことを「条件」と呼ぶことにする。

示すことであると定義する。その「時」と「条件」のどちらが前景化するか背景化するかによって、条件的な意味を帯びたり、純粹に時を示したりすると思われる。時の節が ET と RT の時間関係を示すという本来の役割を失う理由があれば、時の節と主節が表す命題 (p と q) の論理的関係に焦点があたることで条件文化するのであるが、そのきっかけは様々であり、属性化を示す cuando 文が総称的條件文化するのは、出来事の繰り返しによるものであるといえよう。

これらのことを踏まえ、本稿では mientras + sub¹⁷について、マイコーパス¹⁸の実例文を基にした意味論的分析をし、mientras + sub と後時性の関係、また mientras + sub と「時」と「条件」の関係について考察を行う。また、mientras は時間幅を示すと考えられているが、その時間幅が叙法選択に影響を及ぼしているのかについても明らかにしたいと考える。

1. mientras 節における叙法に関する先行研究

1. 1. 後 時

まず、mientras + sub について後時性の観点から扱った研究をみてみよう。Pérez Saldanya (1999) は mientras 節の叙法について、後時性の観点から次のように論じている。

El nexu mientras posee, además del valor de simultaneidad, un valor aspectual de duración. (...) Con indicativo la oración subordinada denota un evento que se está produciendo, en el momento que se toma como referencia y que se prolonga con posterioridad a este momento (...) con subjuntivo, por el contrario, la oración se refiere a una circunstancia

17 本稿では mientras 節における叙法が接続法の場合を mientras + sub と表すことにする。

18 下記のスペインとラテンアメリカにおける全10作品をまとめた (スペインの口語資料を含む) を指す。

Bestias: Allende, Isabel (2002) *La ciudad de las bestias*, Harper Collins Publishers Inc., New York.

Juan: Benet, Juan (1998) *Cuentos completos (Alfaguara)*, Santilla, Madrid.

Luz: Casariego, Nicolás (2005) *Cazadores de luz*, Ediciones Destino, Barcelona.

Castilla: Delibes, Miguel (1986) *Castilla habla, Destino*, Barcelona.

Madrid: Esgueva, Manuel y Margarita Cantarero (1981) *El habla de la ciudad de Madrid: materiales para su estudio*, Consejo Superior de Investigaciones Científicas. Instituto 'Miguel de Cervantes', Madrid.

Chocolate: Esquivel, Laura (1989) *Como agua para chocolate*, Novoprint S.A., Barcelona.

Milagro: Etxebarria Lucía, (2004) *Un milagro en equilibrio*, Planeta, Barcelona.

Amor: Rivas, Manuel (2000) *¿Qué me quieres, amor?*, Suma de Letras, S.L., Madrid.

Inglés: Soler, Antonio (2004) *El camino de los Ingleses*, Ediciones Destino, Barcelona.

Encargo: Zarraluki, Pedro (2005) *Un encargo difícil*, Ediciones Destino, Barcelona.

posterior al momento de referencia y, por lo tanto, a una circunstancia eventual.

(155) a. Nos iremos mientras Pedro {duerme/duerma}.

b. Dijeron que se irían mientras Pedro {dormía/durmiese}.

(Pérez Saldanya 1999: 3312)

これによると、『mientras+ind¹⁹は、RTにおいてすでに生起して、後時に及ぶ出来事について、また mientras+sub は RT に生起していない後時の出来事について述べる』ということになる。確かに、上記の例文を見る限り、RTにおいて「Pedro がすでに眠っているかどうか」によって、mientras 節における叙法は決定されているようである。しかし、実際には (1) のように RT において E₁ と E₂ が実現しているにも関わらず、mientras+sub の形態をとる実例がみられる。

- | | | |
|---|----------------|------------------|
| E ₁ | E ₂ | |
| (1) - Y tú <u>mi mejor amigo</u> ²⁰ , mientras <u>podamos vernos con el corazón</u> -replicó | | |
| <u>Nadia Santos.</u> | | (Bestias, p.401) |

例文 (1) は、RT において、すでに E₁ と E₂ が実現しているが、mientras+sub の形態をとっていることから、後時性のみが mientras+sub を決定する要因ではないと考えられる。では、mientras+sub を決定している要因は条件性であろうか。つづいて、条件性の観点から、mientras+sub を考察する。

1. 2. 条件文化説 (Porto Dapena, Pérez Saldanya, García Fernández)

ここでは、mientras+sub について、条件性の観点から考察した研究を取り上げる。Porto Dapena は、mientras+sub のとき、時の意味価が薄れることについて言及している。

... con subjuntivo la oración introducida por *mientras* tiende a perder en mayor o menor grado su carácter temporal, para adquirir un sentido al mismo tiempo condicional.)

Mientras estudies, aprobarás sin dificultad. (ibid.)

Mientras no consigamos la subvención, no podremos iniciar el

19 本稿では mientras+ind は mientras 節における直説法を指す。

20 以下、例文の下線は筆者による。

trabajo. (ibid.)

*No te dejaré salir mientras prometas que te vas a portar bien.
(ibid.)*

(Porto Dapena 1991: 187)

Porto Dapena は *mientras*+*sub* について、『条件の意味価を帯びるため、多かれ少なかれ時の性質を失う』と述べているが、時と条件について規定しておらず、またなぜ条件の意味価を帯びるのかについても具体的な説明を行っていない。

一方、Pérez Saldanya は、『時の文が偶発的な性質 (*carácter eventual*) を呈するときに、条件文化する』として、次のように述べている。

El carácter eventual que las oraciones temporales presentan en determinados contextos justifica que algunos nexos temporales hayan sufrido procesos de gramaticalización y puedan asumir valores condicionales junto a los temporales. Concretamente, los nexos *siempre que o mientras (que)* pueden funcionar como conjunciones condicionales cuando seleccionan el subjuntivo y aparecen a la circunstancia planteada en la subordinada, como en los ejemplos siguientes...

(156) ... b.No nos molestará mientras no nos metamos con él.

(Pérez Saldanya 1999: 3312)

しかし Pérez Saldanya は、偶発的な性質により *mientras*+*sub* が条件文化することについて指摘しているのみで、その関係については具体的な説明をしていない。

一方、García Fernández は、次のように、*mientras*+*ind* が後時を示すことによって、*mientras*+*sub* が条件文化していることを示している。

Señalamos, por último, que, en estos casos, para hacer referencia al futuro, se usa el presente de subjuntivo, pero que cuando *mientras* tiene estrictamente significado temporal, se usa el presente de indicativo: Llamaré mientras Pablo hace sus ejercicios de solfeo.

(García Fernández 2000: 275-276)

ここで García Fernández は、『厳密に時を表したいときは、後時に言及しているときでも、*mientras*+*ind* を用いることを指摘することで、*mientras*+*sub* のとき、これが条件文化している』ことを示唆しているが、その理由については説明していない。

そこで、次章において、*mientras*+*sub* の実例を考察することで、その理由を明らかにしたいと考える。

2. *mientras*+*sub* の実例検証

Pérez Saldanya (1999: 3312) が、『接続詞 *mientras* は、同時の意味価に加えて、継続アスペクトの意味価を呈する』と説明しているように、*mientras* 文²¹ が示す ET_1 と ET_2 は、ある一定期間の重なりをみせている。そして、*mientras* 文はその期間を抜き出すが、その期間を DM と呼び、以下の図では、 ET_1 と ET_2 を二種類の点線で表し、時間が進む方向を矢印で表すとすれば、*mientras* 文は DM 外の ET_1 と ET_2 には言及せず、DM において重なり合っている ET_1 と ET_2 にのみに言及していることになる。

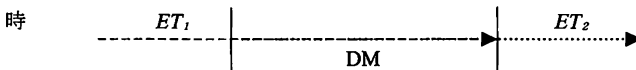


図 1

図 1 の DM 内において、 $ET_2 \cdot ET_1$ の継続時間は同じであり、*mientras* 節の表す命題 p と主節の表す命題 q もまた、等価であると考えられる。その *mientras* 文の示す命題（以下、 Mpq と呼ぶ）は、 p であれば q である ($p \rightarrow q$) を表し、DM においては満たされているものの、DM 以外において Mpq は満たされない、そのとき *mientras* 文は、命題の裏²²（以下、裏 Mpq とする）を満たしており、 p でなければ q ではない ($\neg p \rightarrow \neg q$) を表しているのである。すなわち、*mientras* が DM を規定すれば、自動的に DM 外も規定されてしまい、DM において満たされる *mientras* 文の命題 Mpq と、DM 外において満たされる裏 Mpq との間に、二項対立を生じさせると考えられる。

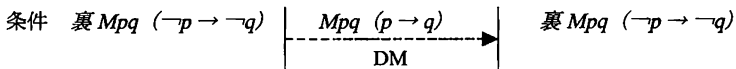


図 2

21 本稿では *mientras* 節と主節を合わせて *mientras* 文と呼ぶ。

22 本稿では *mientras* 文が表す前件命題 p ($\neg p$) と後件命題 q ($\neg q$) をあわせて *mientras* 文の示す命題とし、また *mientras* 文が示す前件命題 p ($\neg p$) の裏 $\neg p$ (p)、後件命題 q ($\neg q$) の裏 $\neg q$ (q) をあわせて、*mientras* 命題の裏と呼ぶことにする。

図2では、RTがDM内にあれば *mientras* 文は *Mpq* を示し、RTがDM外にあれば裏 *Mpq* を示すことから、前件命題 *p* はRTにおいて真であることがすでに決定されているか、まだ決定されていないかによって分けて分析を行う。なお、RTにおいて *p* まだ満たされていることをRTにおける *p* = -real、*p* がRTにおいてすでに満たされていないことをRTにおける *p* = +realとする。

「属性化」については、*p* = +real と -real には分類せず、後の2. 3. 属性化で詳しく扱うことにする。

2. 1. RTにおける *p* = -real

これまで述べてきたように、*mientras* + sub は時間幅を有することから、RTにおいてまだ満たされていない命題だけではなく、RTにおいてすでに満たされている命題についても言及することができる。ここでは、*mientras* 節の表す命題（前件の命題）*p* が、RTにおいてまだ満たされていない例文について考察する。

- p* *q*
- (2) Mientras más distancia tomemos de estas personas, será más fácil protegernos de su sople. (Chocolate, p.103)

mientras 節の示す命題を前件命題 *p*、主節の示す命題を後件命題 *q* とすれば、例文(2)では、RTにおいて前件命題 *p* 「こんな人たちからもっと距離をとる」がまだ満たされていない。したがって、*mientras* + sub の後時指向により、もし *p* が満たされれば *q* として *Mpq* が読み込まれ²³、ここでは「こんな人たちからもっと距離をとればとるほど、告げ口から身を守るのがより容易くなるだろう」が表される。

- q* *p*
- (3) Además, sentiría envidia de él, que podría vivir su vida mientras yo esté muerta. (Luz, p.77)

例文(3)において、RTがDM外にあり、命題 *p* がRTにおいてまだ満たさ

23 本稿では、*Mpq* の示す命題を解釈することを、*Mpq* を読み込む（*Mpq* が読み込まれる）とする。

れていない、つまり裏 Mpq が満たされていることになるが、*mientras*+*sub* の後時指向によって、*mientras* 文はやがて満たされる命題 Mpq を示唆することになる。したがって、 p が満たされれば q として Mpq が読み込まれ、その結果 (10) は、「もし私が死んだら、...彼をうらやましく感じるだろう」という意味になるのである。

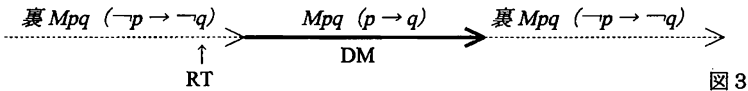


図 3 において、RT では p が満たされていない ($p = -real$) ときは、RT は DM 外にあるため、前件命題 p は RT においては真ではなく、 Mpq は偽である。つまり、RT においては裏 Mpq が表されているのである。したがって、 $Mpq (p \rightarrow q)$ はまだ満たされていない命題であるから、もし p が満たされれば q として、 Mpq が読み込まれるのである。つづいて、RT における $p = +real$ の例文を考察してみよう。

2. 2. RT における $p = +real$

mientras の示す時間幅は、 p が RT において生起しているかどうかに関わらず、 Mpq が満たされ始めてから、満たされてなくなるまでの期間 (DM) を作り出す。RT における $p = +real$ のときは、RT がその DM 内にあり、 Mpq が RT においてすでに満たされはじめているため、*mientras*+*sub* の後時指向によって、その Mpq が満たされなくなる点、つまりそれは、 Mpq の終了点が示唆されることから、 p が満たされ続ける限り q として Mpq が読み込まれるのである。

- q p
- (4) [(1) の再録] - Y tú mi mejor amigo, *mientras* podamos vernos con el corazón -replicó Nadia Santos. (Bestias, p.401)

例文 (4) において、RT では Mpq はすでに真である、つまり、RT における $p = +real$ であるから、 p が満たされ続けている限り q として、 Mpq が読み込まれ、ここでは「心を開いて会うことができる限り、君は親友だ」が表す。RT から Mpq が満たされなくなる点までが表されることで、 Mpq の終了点

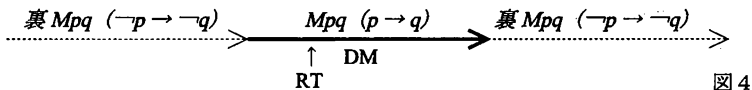
以後に満たされる裏 Mpq 「心を開いて会うことができなくなれば、君は親友ではなくなる」が示唆される²⁴。

- (5) ...tal vez porque soy igual de sensible a la cebolla que Tita, mi tía abuela,
quien seguirá viviendo mientras haya alguien que cocine sus recetas.
q p (Chocolate, p.210)

例文 (5) においても (4) と同様に、mientras+sub の示す前件命題は、RT においてすでに真である。つまり、RT において Mpq はすでに満たされはじめていることから、Mpq が満たされなくなるまでを含意して、「彼女のレシピで料理し続ける人があるかぎり、私の大叔母は生き続けるだろう」を表す。一方、Mpq を p である限り q として読み込むとき、mientras 文は Mpq の終了点までを含意し、同時に、裏 Mpq 「彼女のレシピで料理し続ける人がいなくなれば、私の大叔母は生き続けられないだろう...」を示唆する。

- (6) Mientras lo tuviera estaba a salvo. (Bestias, p.289)
p q

例文 (6) における RT は発話時ではなく、過去時にあるが、(4)(5) と同様に、RT においてすでに Mpq が満たされていることから、Mpq が満たされなくなるまで（終了点）を示唆し、p が満たされていた限りは q だったとして、Mpq が読み込まれるため、ここでは「それ（お守り）を持っている限り、無事でいた」を表している。そのとき、mientras 文は、命題 Mpq がやがて満たされなくなることを明示することで、裏 Mpq 「それを持たなくなれば、無事ではいなかった」を示唆する。



24 坂原 (1985: 100-101) は、誘導推論を「“p ならば q” から “¬p ならば ¬q” と推論するように問いかける」ことであると説明して、「加山が謝罪するなら、彼の無礼を忘れてやる。加山が謝罪しないなら、彼の無礼を忘れてやらない」を例に挙げている。

RTにおけるpが+realのとき、RTにおいてMpqがすでに満たされ始めている(真である)ため、mientras+subの後時指向は、Mpqがやがて満たされなくなる(偽になる)ときまでを含意し、pである限りはqとしてMpqが読み込み、同時に裏Mpqであるpでなくなればqでなくなる、をも示唆する。

mientras+subの後時指向により、RTにおいてMpqが満たされていれば、裏Mpqが、また、RTにおいて裏Mpqが満たされているときは、Mpqが示唆される。つまり、mientras+subの後時指向は、RTにおいてMpq、あるいは裏Mpqが満たされていても、後時において、やがてそれらが満たされなくなることを含意している。

2. 3. 属性化

近藤(2006)では前時からRTまでのE₁とE₂は、繰返しにより、後時においても同様に繰返されるであろうことが予想され、これらの関係が論理的である、つまりpであればqであるという解釈が可能になると述べた。そして、繰返し、いわゆる習慣、あるいは一般、総称を含めて、これら全てを属性化と呼んだ。cuando+indが属性化を示すとき、RTより後時についても言及できることから、cuando+subと+indは置き換え可能になる場合がある。

(7) Levántate cuando te hable/habla una persona mayor.

(Porto Dapena 1991: 186)

(8) Debemos ayudar a cualquiera cuando lo necesite/necesita. (ibid.)

近藤(2006)では、(7)(8)のようにcuando+indと+subの両叙法を許容する属性化を示すcuando文について考察した。インフォーマントチェックによれば、cuando+indのとき、出来事を一般的なこととして聞き手に伝えているのに対して、cuando+subのときは、とりわけ後時で個別的な出来事として提示し、聞き手の注目を引くことを確認した。

mientras+subもcuando+subと同様に、一見、前時から後時に渡ってpであればqを示す、つまり属性化を表しているようにみえる場合も、実際はmientras+subの後時指向により、個別で後時の命題についてのみに言及していると考えられるが、それをp=-realあるいは、+realに分類するかは、

実例文を考察しながら検討したい。

- p q
- (9) Mientras obtenga comida, el elefante no tiene por qué moverse de la sombra de su árbol. (Luz, p.203).

例文 (9) は、象についての一般的な性質、つまり属性化を示しているようにみえるが、しかしここでは、**mientras + sub** を用いて属性化をあえて個別で後時の出来事として提示して、行動様式を説明している。敵は RT においてすでに食べ物を所有していることから、RT における $p = +real$ であるので、 p が満たされる限りは q であるとして、 Mpq が読み込まれ、「食べ物を所有している限り、象は木陰から動く理由はない」を表されており、同時に裏 Mpq 「食べ物がなくなれば、象（敵）は木陰から動かなければいけない」が示唆される。

- (10) La primera lección de montañismo de su padre había sido que mientras estuviera tenso, ansioso o apurado, la mitad de su fuerza se dispersaba. (Bestias, p.141)
- p q

例文 (10) は、山登りに関するアドバイスについて言及しており、一般的な山登りのアドバイスであれば、前時から後時において普遍的であることから、属性化で表しているようにみえる。しかし、ここでは、聞き手にとっては RT の時点で、 $p = -real$ であるから、後時で個別の Mpq として提示されているため、 p であると q として Mpq が読み込まれ、ここでは「彼の父の山登りにおける最初の教えは、『緊張したり、心配になったり、急いでいると、人は力の半分を失う』というものだった。」を表している。

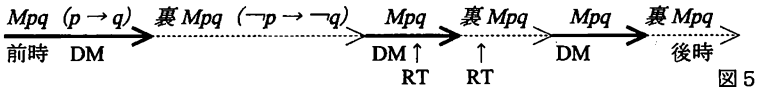


図 5 は、属性化と RT との関係を示しているが、**mientras + sub** は、その前時から後時に渡る $p \rightarrow q$ の中で、とりわけ後時で個別の Mpq ($p \rightarrow q$) への

み言及することから、属性化を表さない Mpq における場合と同様に、 RT が DM 内にあれば $p = +real$ であり、 DM 外にあれば $p = -real$ である。したがって、 $mientras + sub$ の後時指向によって、属性化を示す $mientras$ 文は、前時から後時に渡る Mpq と裏 Mpq の連続の中でもとりわけ後時で個別の Mpq のみを抜き出す。したがって、属性化を示すようにみえる $mientras$ 文も、 $mientras + sub$ の後時指向によって、属性化を示さない $mientras$ 文と同様に RT と DM の関係によって、 Mpq を読み込むのである。

3. *mientras no + sub* について

マイコーパスにおける *mientras no* の実例は10例であり、そのうち1例²⁵のみが *mientras no + ind* である。なお、*mientras + ind* の総数が521例であることを考えれば、*mientras no + ind* は全体の1%以下である。一方、*mientras + sub* の実例数32例中、*mientras no + sub* が9例であり、全体の約1/3を占める。

Sastre Ruano (1997: 154-155) は否定(辞)と条件の関係について、次のように説明している。

Esta relación condicional se intensifica cuando la cláusula introducida por mientras está afectada por la negación.

Ej.: ... Mientras no levantes no podremos saber si el tobillo está roto o no.

Todo debe ser respetado, mientras no dañe a nadie o trate de imponer por la fuerza una visión del mundo restrictiva y totalitaria.
(10: 30)

Nada tiene existencia mientras uno no lo cuenta. (13: 261)

Mientras no termines la carrera no podrás dedicarte a buscar un empleo.
(Sastre Ruano 1997: 154-155)

Sastre Ruano は『*mientras* 節が否定(辞)の影響をうけると、条件的関係が強まる』ことを指摘しているが、なぜ否定(辞)によって条件的関係が強まるのかについては言及していない。本稿で論じてきたように、*mientras* 文が一定の期間を示す性質によって Mpq ($p \rightarrow q$) を表すとき、同時に、裏 Mpq ($\neg p \rightarrow \neg q$) を示唆することと関係が深いように思われる。前件命題が $\neg p$ のとき、後件命題も $\neg q$ である場合と、後件命題 q の場合があるが、

25 Vivimos más o menos felices mientras no sabemos lo que somos... (Milagro, p.213)

ここではそれらを分けて扱うことにする。

3. 1. RT における $\neg p = +real$

3. 1. 1. RT における $\neg p \rightarrow \neg q$

まず、mientras 文の表す前件命題 p と後件命題 q のどちらも RT において偽である、 Mpq ($\neg p \rightarrow \neg q$) の実例文について考察してみよう。

- (11) $\overset{q}{\text{... no acudiré aquí}} \text{ mientras } \overset{p}{\text{no reciba por escrito la seguridad de que}} \text{ renuncian a los buenos oficios de su misericordia...}$ (Juan, p.182)

- (12) $\overset{q}{\text{Como al principio no tenía muy claro si encontraría trabajo y no quería}} \text{ alquilar un piso mientras } \text{no supiera qué iba a ser...}$ (Milagro, p.173)

p

例文 (11) は、 p でなければ q ではないとして Mpq を読み込む、つまり $\neg p \rightarrow \neg q$ を表しているが、前件命題 $\neg p$ は、RT において $\neg p = +real$ であり、RT において前件命題 p が偽であることは決定されている。ここでは「...書面で受け取らない限りは（書面で受け取るまでは）、私はここには来ない」を表す。

また例文 (12) でも、RT が過去時にあるものの、(11) と同様に、RT における $\neg p = +real$ であり、RT において前件命題 p はすでに偽であることが決定されている。したがって、 p でない限り (p であるまでは) q でなかったとして Mpq が読み込まれ、「どうなるか分からない限りは（どうなるか分かるまでは）、マンションを借りたくなかった」と解釈できる。

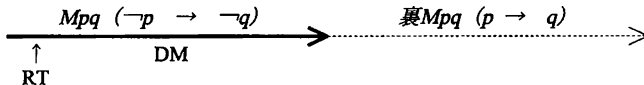


図 6

3. 1. 2. RT における $\neg p \rightarrow q$

次に、RT において、前件命題が偽 ($\neg p$) であり、後件命題が真 (q) であることが決定されている実例について考察してみよう。

- p q
- (13) Mientras no lleves a tu hija al campo, creará que la leche viene de las cajas del supermercado. (Sastre Ruano 1997: 154)

- p q
- (14) Mientras no estuviera a salvo en el apartamento de Kate Cold, esos tres billetes doblados y vueltos a doblar eran todo lo que poseía en este mundo... (Bestias, p.32)

例文 (13) では、RT において $\neg p = +real$ である、つまり、前件命題 p が偽であることが決定されており、同時に後件命題 q が真であることも分かっている。したがって、 p ではない限り (p であるまでは) q として $Mp q$ が読み込まれ、「君のお嬢さんを田舎に連れて行かない限り (連れて行くまでは)、牛乳がスーパーマーケットの箱から来ているのだと思うだろう」という解釈が可能である。

また例文 (14) は、RT が過去時にあるものの、(13) と同様に、 $\neg p = +real$ である、つまり RT において、前件命題 p が偽であり、後件命題 q が真であるため、 p でない限り (p であるまでは) q として $Mp q$ が読み込まれ、「Kate Cold のアパートに到着しない限りは (到着するまでは) 幾重にも折りたたんだ三枚の紙幣だけが、この世で唯一の救いだった」ことを示している。

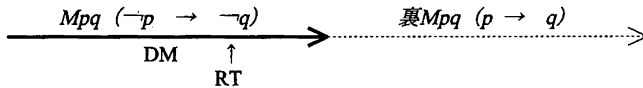


図 7

RT において前件命題が偽である ($\neg p$) ことが決定されていれば、後件命題が真である (q) か偽である ($\neg q$) かに関わらず、前件命題 $\neg p$ が、 p の命題の裏であることから、原命題²⁶である p を喚起しやすくなる。したがっ

26 本稿において、原命題とは、命題の裏 $\neg p$ からみた p を指すことにする。

て、 p でない限り q である (q でない) は、すなわち、 p であるまでは q である (q でない) を示していると考えられる。*mientras no+sub* は、命題の裏 ($\neg p$) を明示することから、原命題 (p) を喚起しやすいと考えられる。

4. おわりに

時の節における叙法は、一般的に、後時・非後時により決定され则认为られているが、本稿で扱った *mientras* 節は、それとは異なり、時間幅を示すため、*mientras+sub* は RT においてすでに真である命題にも、まだ真ではない命題にも言及することができることから、この *mientras* が示す時間幅 (DM) と RT の関係に注目した。

mientras+sub が条件文化する要因の一つとしては、*mientras* が示す時間幅 (DM) が考えられるだろう。*mientras* 文は、DM を規定すると同時に、DM 外を作り出してしまうことになる。それゆえ、DM 内では *mientras* 文が示す命題 (Mpq) が満たされているにもかかわらず、DM 外では Mpq が満たされない (つまり、裏 Mpq を満たす) ことから、 Mpq と裏 Mpq が二項対立を起こしやすくなると考えられる。

mientras+sub が条件文化するもう一つの要因としては、*mientras+sub* の後時指向が挙げられる。DM 内では Mpq が満たされており、DM 外では裏 Mpq が満たされていることから、RT が DM 内にあるときは、 Mpq は真であり、RT が DM 外にあるとき、 Mpq は偽、裏 Mpq が真である。つまり、RT において Mpq が偽のとき、やがて Mpq が真になることを示唆され、RT において Mpq が真であれば、 Mpq がやがて偽になることをも示唆される。これは *mientras+sub* が RT 以後に言及する、後時指向の性質によるものであると考えられる。

mientras 文の示す前件命題 $p = -real$ のとき、RT は DM 外にあることを示しており、前件命題 p は RT においてまだ真ではないが、*mientras+sub* が後時を示す性質から、 Mpq は「(RTにおいて偽である) p が真になれば q も真になる」として読み込まれる。一方、前件命題 $p = +real$ のときは、RT が DM 内にあるため、前件命題である p が RT においてすでに真であるが、*mientras+sub* が RT よりも後時を示すため、 Mpq は「 p が真であり続ける限り q も真であり続ける」として読み込まれ、それと同時に、裏 Mpq である「 p が偽になれば q も偽 ($\neg p \rightarrow \neg q$)」が示唆される。

また、*mientras no* の示す条件文には、 p でなければ q でない ($\neg p \rightarrow \neg q$)

と p でなければ q である ($\neg p \rightarrow q$) の二種類があるが、いずれも前件命題が RT において偽であることが定まっている。したがって、後件命題が真であれ、偽であれ、前件命題として p の裏命題である $\neg p$ が明示されているため、原命題 p が喚起されやすい。また、前件命題 p の偽が RT において決定されていることから、 Mpq は、 p が偽である限りは q も偽 (q は真)、あるいは、 p が真になるまでは q は偽 (q は真) として、読み込まれることから、 p の裏命題 $\neg p$ (偽) は、原命題 p (真) を喚起しやすいのである。

以上をまとめると、*mientras*+*sub* が条件文化するのは、*mientras* の時間幅 (DM) と *mientras*+*sub* の後時指向により、 Mpq と裏 Mpq が二項対立を生じさせることによるものであると考えることができるだろう。

参考文献

- Borrego Nieto, Julio et al. (1985) *El subjuntivo: valores y usos*, Sociedad General Española de Librería, Madrid.
- Comrie, Bernard (1985) *Tense*, Cambridge University Press, Cambridge.
- García Fernández, Luis (1999) “Los complementos adverbiales temporales. La subordinación temporal”, *Gramática descriptiva de la lengua española* (ed. Ignacio Bosque y Violeta Demonte), Espasa Calpe, Madrid.
- (2000) *La gramática de los complementos temporales*, Colección Gramática del Español 5 dirigida por Ignacio Bosque, Visor Libros, S. L., Madrid.
- Gili Gaya, Samuel (1991) *Curso superior de sintaxis española*, Biblograf, Barcelona.
- Givón, Talmy (1994) “Irrealis and the subjunctive”, *Studies in language* 18-2, John Benjamins, Amsterdam, 265-337.
- Haverkate, Henk (2002) *The Syntax, Semantics and Pragmatics of Spanish Mood*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam.
- Kondo, Yuka (2004) “El subjuntivo de V2 en cláusulas introducidas por “cuando” y su relación con V1 desde el punto de vista estadístico”, *Lingüística Hispanica*, vol. 27, 37-56.
- Pérez Saldanya, Manuel (1999) “El modo en las subordinadas relativas y adverbiales”, *Gramática descriptiva de la lengua española* (ed. Ignacio Bosque y Violeta Demonte), 3, 3253-3322.

Porto Dapena, José Álvaro (1989) *Tiempos y formas no personales del verbo*, Arco/Libros, Madrid.

————— (1991) *Del indicativo al subjuntivo*, Arco/Libros, Madrid.

Sastre Ruano, M^a. Ángeles (1997) *El subjuntivo en español*, Colegio de España, Salamanca.

有田 節子 (2004) 『(不) 完全時制節と日本語条件文』、京都大学博士論文。

近藤 由佳 (2004) 『現代スペイン語の cuando 節における叙法』、大阪外国語大学修士論文。

坂原 茂 (1985) 『認知科学選書 2 日常言語の推論』、東京：東京大学出版会。

杉本 孝司 (1998) 『意味論 1－形式意味論－』、くろしお出版。

藤村 龍雄 (2005) 『よくわかる記号論理』、勁草書房。

益岡 隆志 (1993) 「条件表現と文の概念レベル」、『日本語の条件表現』、くろしお出版、23-40。

口頭発表

近藤 由佳 (2006) 「quando 節の叙法 一帰属化一」、日本イスパニヤ学会第52回大会口頭発表。

電子資料

CREA

Corpus de Referencia del Espanol Actual

<http://corpus.rae.es/creanet.html> (2006年3月)

マイコーパス

Bestias: Allende, Isabel (2002) *La ciudad de las bestias*, Harper Collins Publishers Inc., New York.

Juan: Benet, Juan (1998) *Cuentos completos (Alfaguara)*, Santilla, Madrid.

Luz: Casariego, Nicolás (2005) *Cazadores de luz*, Ediciones Destino, Barcelona.

Castilla: Delibes, Miguel (1986) *Castilla habla*, Destino, Barcelona.

Madrid: Esgueva, Manuel y Margarita Cantarero (1981) *El habla de la ciudad de Madrid: materiales para su estudio*, Consejo Superior de Investigaciones Científicas. Instituto 'Miguel de Cervantes', Madrid.

Chocolate: Esquivel, Laura (1989) *Como agua para chocolate*, Novoprint S.A., Barcelona.

(近 藤)

Milagro: Etxebarria, Lucía (2004) *Un milagro en equilibrio*, Planeta, Barcelona.

Amor: Rivas, Manuel (2000) *¿Qué me quieres, amor?*, Suma de Letras, S.L., Madrid.

Ingleses: Soler, Antonio (2004) *El camino de los Ingleses*, Ediciones Destino, Barcelona.

Encargo: Zarraluki, Pedro (2005) *Un encargo difícil*, Ediciones Destino, Barcelona.